

ベッドの上——それはある程度年を重ねた者達にとって、特別な意味を持つ場所。

千尋は彼方をそこに押し倒し、情熱的なキスを交わしていた。

「ん、ちゅ……ちゅる……」

「んんっ……んあ、はあ……んう……」

部屋に鳴り響く官能的なキスの音。千尋と彼方はお互いの舌を絡めあい、体液の全てを交換するように相手の唾液を貪っていく。もがくように互いに求め合った結果、彼方は何時の間にかブレザーが脱げてしまっていた。千尋もズボンも脱がされたまま。

しかしそんな事は関係ないとばかりにキスだけに熱中する。

これが人生で二度目の恋人とのキスだという事を、少なくとも千尋は、そして恐らく彼方も忘れかけていた。

「ちゅうう……ふはっ」

「んあ、んー……んあー……」

前回の失敗から何も学んでいないキスは、また官能的になり過ぎた事による息苦しさと終わりとなる。だがまだまだし足りない。足りないのなら回数を重ねれば良い。

千尋はもう一度キスをしようと彼方に顔を近付ける。

残念な事にその欲求は、目から光が無くなった彼方を見て自制せざるを得なかった。

「……おーい。彼方さーん？」

「はあー……はあー……ふえ？」

「ふえ、じゃないって。キスでどんだけ興奮してんだよ」

「えう……だ、だって、千尋とのキスだもん……」

泣きそうな顔と甘えた声で答える彼方に、千尋は昂奮するのと共に少しだけ呆れてしまう。

「キスだけでこれじゃあ、これ以上したらどうなるんだろうな？」

「うう。意地悪言わないでよ……」

「はいはい」

これ以上のキスはまた今度にし、千尋は次のステップに進む事にする。そう、これから彼方とセックスする。そのためには準備が必要だ。濡

らさずに肉棒を膣に挿れようものなら、彼方に途轍もなく痛い思いをさせてしまいうだろう。ならば早速秘所に指を入れて解す、と言うのもまだ早い。

まずは胸や身体を撫でるように触る！ それから段々と激しくする！ そうやって性感を高めてくれる雄にしか雌は本性を見せてはくれないのだ！

……………そんな感じの話が描いてある漫画を見た事があるので、千尋はその通りに実践してみる事とした。

「服、脱がすからな」

手始めに服を脱がそうと手を伸ばす。

「や、やだっ!？」

途端、彼方に拒絶されてしまった。

「……………え？」

「あ、いや、あの、ち、千尋に脱がされるのが嫌じゃなくて、あの……ふ、服を脱がされるのは恥ずかしいなって……………」

手始めから躓きパニックになる千尋だったが、彼方の事情を聞いて腹の底から安堵する。

「そういう事なら、うん、仕方ない。じゃあ脱がすのは、また今度……という事で。えっと、じゃあ裸には、なつてくれないのか？」

「そ、それなんだけど、条件を付ければ良いかなって……………」

「条件？」

「千尋も、は、裸になってほしい……………のと、あと、脱いでる姿は見えないでほしいなあって……………」

「……………そんな事で良ければ」

お願いを快諾すると、彼方は赤くした顔を俯かせながら背中を向ける。見ないと約束した以上後ろ姿をじっと見つめる不敬な事はしない。千尋もまた彼方に背中を向ける。

そして、後ろから聞こえてくる布と肌の擦れる音に心臓が飛び跳ねた。音だけで何が起きているのか想像できる。彼方は自分の服を一枚一枚、

覚悟を決めるような間を開けた後、一気に脱いでいるようだ。彼方が何枚衣服を付けているかは分からないが、恐らくブラがある分千尋より一枚多い程度。精々四枚だ。

四回音が鳴ったら、自分の後ろに好きな人の裸が現れるのだ。

音を聞く度にまるでカウントダウンをしているような錯覚に囚われ、心臓がバクバクと鳴り響き……………いよいよ音がしなくなった時、千尋は自

分がまだ全然服を脱いでいない事によく気付いた。

「脱ぎ終わったけど……千尋は？」

「す、すまん！ 夢中になっててまだ脱いでない！」

「夢中？」

「あ、いや！ 違います！ 音、音に夢中になっていましたから！ もうぱぱっと脱ぎます！ はい出来た！」

地雷を踏もうとする自分の発言を必死に誤魔化し、慌てて服を脱ぎ捨てる。時間にして僅か十秒。真っ裸になった千尋は彼方に準備完了を伝えた。

「じゃ、じゃあ、私がいつせーのせって言ったら、振り返って良いからね？」

「ああ、わかった」

「い、いくよ？ ……いつせーの…せつ！」

彼方の言葉に合わせ、千尋は愛しい人の方へと振り返る。

そこで千尋は息を飲んだ。

白い肌はまるで雪のようで、触ったら溶けて消えてしまいそうなほど儂く見えた。鎖骨の絶妙なラインはそれだけで芸術品のよう。うっすらとしか毛の生えていない秘部もまた上品さで満ち満ちている。服越しからも分かる大きな乳房は今や見ただけで張りの良さが分かる肌と、愛らしさと卑猥さを兼ね備える頂点が丸見えだ。

何よりも美しいのは引き締まった身体の輪郭。柔らかそうな雰囲気を残しつつ余分なものが何もないスタイルは、何かに例える事がおこがましく思えるほど魅力的だ。

「あの、綺麗、だ。最高だ。抱きしめたいぐらいに」

千尋は我を忘れ、思った事をそのまま彼方に伝えていた。

「千尋も、その、大きい、ね？」

すると彼方もまた千尋の身体の——かなり局所的な部分の感想を言うてくれた。

視線を落としてみると、千尋は自分の分身が何時も以上にいきり立っている姿を目の当たりにする。普段見慣れている姿とは全く違い、一体自分は何だけ興奮しているんだ、と呆れてしまうほどだ。まだまだ始まったばかりだと言うのに身体の方はクライマックスを迎えているらしい。

「彼方の裸を見て興奮したからな……その、怖いかな？」

「うーん、怖いと言うよりも……強そう？」

「っ、強そうか」

「うん。すごく強そう。なんか私、倒されちゃいそう？」

何故かはわからないが、生殖器に強いと言う賛辞を送られて千尋は優越感を覚える。強いと言われた力を見せつけてみたくなるが……今はまだ我慢の時。

「ま、まあ、コイツの戦闘力は追々……それよりも、胸、触っていいか？」  
「う、うん。どうぞ」

彼方は自分の胸を両手で持ち上げ、正に差し出すような形で突き出す。献身的、と呼ぶにはあまりにも性的な雰囲気は漂う姿に生唾を飲みつつ、千尋はゆっくりと手を伸ばし……ついに、夢に見るほど望んでいた膨らみを掴んだ。

その瞬間思ったのは、暖かい、だった。

じゃれ合ったりしている時とは違う、手に馴染むような暖かさが掌から伝わってくる。あまりにも馴染むものだから、掌が彼方と溶け合っているのではと錯覚しそうなほど。指に力を入れると歪んだ乳房に包まれ、ますます溶け合っているような気分を味わえる。

その感覚をもっと貪りたいと思った時、千尋は無意識に彼方の胸を揉みしだいていた。

「んっ、んう、んんっ……」

「あ、い、痛いのか？」

「う、ん……だ、大丈夫……」

耐えるように目を細めながら、彼方は掠れた声で答える。虚勢を張っているのは間違いない。彼方に辛い思いはさせたくないのでもっと優しく触れるようにしたいが、今の千尋にそれは出来そうになかった。

欲望のまま馴染んでも彼方を苦しめない愛撫……そんな都合のいいものがないか、千尋は昂奮のあまり熱暴走しそうな頭で考える。

そんな状態で閃いたのが漫画などで見た、舐めると言う行為だった。

「ちよつと舐めてみるぞ」

「な、舐めるって何んひゃあっ!？」

問答無用とばかりに千尋は彼方の胸に吸い付き、早速口を使った愛撫を試してみる。

優しく乳房を舐めると、彼方はぞくぞくと身体を震わせて息を乱す。乳首を舌で転がしてみると、ビクッ、ビクッ、と大きめに身体を震わせる。

そして乳首を吸ってみると——彼方は幸せそうな甘い吐息を出し、

痙攣しているかのように小刻みな震え方をした。

「ひうううううううう……な、なんひや、すごいよお……」

「ふはっ……そ、そう、か？ あ、感じてる、のか？」

「はあ、はあ、はあ……多分、そうかも……もつと、乳首吸ってほしいから……」

顔を真っ赤にしながら恥辱を欲しがると彼の姿に千尋の心臓は大きく波打つ。乳首を吸ってと言われたが……欲望を後押しされた千尋にとつて、その行為は物足りなさを感じるものとなった。

もつと凄い事がしたい。思った時にはもう身体が動いていた。

「な、なら、こつちを吸ったらもつと気持ちいいかもしれない、ぞ！」

「え？ それってどういうこちよわあ!？」

我ながら訳が分からないと思う建前を掲げるや、千尋は彼の足を掴んで自分の方へと引き寄せる。バランスを崩された彼は悲鳴と共に転倒。仰向けで寝っころがる形になり、下半身を持ち上げられた、いわゆるまんぐり返しの姿勢になった。

「だだだだダメダメダメ!？ こんな、恥ずかしいよお!？」

流石に性器がむき出しになるのは耐えられないのか、彼は足を閉じようとする。しかしそんな事は千尋が許さない。頭を突っ込み、足を閉じられないようにした。

だから千尋の視界には、物欲しそうにひくつく彼の膣穴がいつぱいに広がった。

(す、すげえ……ここが彼方の……っ！)

ぐにぐにゆとした肉壁が集まっている、グロテスクさを感じる風貌。だが見たからと言って不快感を催す訳ではなく、むしろ美しい裸体との差がそのまま淫らな雰囲気に見える。体液でぬらぬらと輝く姿や時折呼吸をするようにひくつく動きは、まるでオスを誘っているかのようだ。興奮しているからかぷっくりと膨れている(尤も普段の状態など知らないが)陰核も実にいやらしい。両手で顔を覆い隠す彼方と違い、雌の部分は犯される気満々に見える。

肢体や胸を見た時とは違う、正に『性器』を見たから感じる興奮……本能を揺さぶる衝動に囚われた千尋は、気が付くと彼の膣穴に口づけしていた。

「ひうっ!? そ、そんなと舐めな……」

——ちゅ、ちゅうううう、じゅる。じゅるう、じゅうううううう!

「ひあ、ああああああああああつ!?!」

吸い上げた途端彼方はもがいていた手足をぴんと張りつめ、背筋はエビ反りにし、反抗の言葉が歓喜の声に変わる。千尋の中に唯一残っていた「嫌がる彼方は見たくない」と言う理性もその声で働かなくなり、欲望を止めるモノは何一つなくなった。

暴走する本能のまま、千尋は当然のように彼方の膣奥を目指して舌をねじ込んだ。

——ちゅぷ、ちゅうう、じゆるる、じゅう……

「あ、あくう!? し、舌いれないれよお!?!」

「はんふえはよ……ひははほは……」

「しゃべらないれええええええ!?! んうううううう!」

いくら拒絶されても止める気にはならない。

特別美味と言う訳でもないのに、飲むほど興奮する愛液の味。

舌に纏わりついてくる肉壁の動き。

奥へ奥へと招き入れる絶妙な圧迫感。

舌から流れ込んでくる快楽を、千尋は夢中になって貪っているのだから。

——じゆるじゆるう、じゆるううう……

「ひゅご、ひゅごい……♪ こんらろ、あらま、ばかになりゆう……♪」

蜜を味わっていると、何時の間にか彼方から拒否の言葉は無くなっていった。目はとろんと下がり、官能に浸っている表情がまた千尋の劣情をそそる。

「っ、はあ……彼方、すごくエロい顔してるよ」

「らつてえ……ちひろの舌が、すごい気持ちいいからあ……おっぱいよ  
り気持ちいいよお……」

「初めてなのに気持ち良くなっちゃったのか?」

「うん……わたし、エッチな子だったみたい……もつと、強くして欲しいよお……♪」

意地悪な事を言っても、彼方は怒るどころか更に淫らな言葉で返してくる。嫌悪が欠片も見られない今の彼方は正に『出来上がっている』状態だ。悦ばせたいと言う想いはあったがここまでになるとは千尋も予想外。もしかすると、本当に淫乱な性質だったのかもしれない。舐め続けている膣穴も、吸うのを止めた途端外に零れ落ちた愛液で艶やかに輝いている。

淫乱な少女の気持ちと身体が出来上がっているのなら、これ以上の準

備は必要ないだろう。それに千尋自身、我慢の限界だった。

「……そろそろ、一番すごいのを……？」

「ふえ？ 一番、すごいのを……？」

「セックス。今から彼方のマンコに、俺のチンコ入れちゃうんだぞ……中出しして、妊娠するんだ……」

わざとらしく説明してみると、彼方は光悦とした表情のまま身体を震わせる。そして何度も頷き、早く千尋とつながりたい事を意思表示した。

千尋は彼方をまんぐり返しの姿勢から解放。ベッドの上でぐったりと四肢を広げる彼方を引き寄せ膣穴に肉棒を宛がう。その際、肉先が何かに嵌まったような感触があった。

本能でそれが膣道……尿道や肛門とは違う、本来の意味での性交に使う穴だと分かる。

「入れるぞ。覚悟は、いいな」

最後の確認に、彼方は淫靡な笑みを浮かべて頷いた。

体験版はここまですりなります